

「自ら学び、自ら考える力の育成をめざす」国語科教育

義務教育研修課 指導主事 細島 昌大

要旨

本研究は、「自ら学び、自ら考える力の育成をめざす」国語科教育について、平成10年度小学校国語科教育（研究）講座受講者の研究成果からの分析を基に、今後の国語科教育の在り方について考察した。

研究に際しては、子どもたちが自分の思いや考えを生き生きと発揮できるための授業の在り方に視点を据え研究を進めた。その結果、指導者たちが共通意識の中で、日常生活に必要な「話す・聞く、書く、読む」などの基礎的な内容を繰り返し学習させる必要のあることが明らかとなった。

はじめに

現在、国際化、情報化、少子化が話題となっている。また、物質的に豊かになり、生活が便利になり、望むまま要求が満たされるのが当然視される社会になってきている。そうした中で親の過保護過干渉を通じて大きくなってきた子どもたちは、基本的な体験も少なく、主体性に乏しく、自己統制力が弱く、自己中心的な行動をとることが少なくない。また、言語を正確に理解し表現する能力が低いため、言葉で自分を語ったり、ごく少数の友だちとの簡単な会話しかできないコミュニケーション能力の低下が目立つ現状である。

そんな現代の子どもたちに、言葉を使ったコミュニケーション活動を通じた他者理解や共感的理解をどう高めていくかが大きな課題となっている。

1 研究の概要

(1) 学習指導要領から考える

現行の学習指導要領と新学習指導要領とを比較すると、現行の国語科の目標に比べ、新学習指導要領では、以下のように言語を用いたコミュニケーションに重点が置かれている。

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」

上記の国語科の目標からもわかるように、今回の新学習指導要領での目標の表現の特徴のひとつは、「適切に表現する」と「正確に理解する」の表現と順序が、現行と入れ替わっていること。もうひとつの特徴は、新しく「伝え合う力を高める」という表現が加わった

ことがあげられる。

また、内容においては、現行の「A表現」及び「B理解」の2領域と「言語事項」の構成を改め、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の3領域と「言語事項」の内容で構成されている。このことに関連して、実践的な指導の充実を図る観点から、説明や話し合いをすること、記録や報告をまとめることなどの言語活動例が示されている。

(2) 平成10年度小学校国語科教育（研究）講座より

① 小学校国語科教育（研究）講座受講者の研究テーマ

平成10年度は、小学校国語科教育講座を研究講座として開設した。これは、学校現場で培われている国語科教育について、講座受講者が各々の研究テーマを設定し、そのテーマの解決に向けて一年間取り組む講座である。

以下に受講者自らが設定した研究テーマを抜粋する。

- ・「自分の思いをのびのびと表現できるように」
- ・「自分らしさを精一杯表現する子をめざして」
- ・「人物の気持ちを深く読み取り、コミュニケーション能力に生かせる授業の創造」
- ・「豊かな表現力を培う学習指導の展開」
- ・「一人一人を生かし、豊かに表現する子の育成」
- ・「言語生活を見なおす国語科授業の在り方」

特に、研究テーマの多くは、表現活動を中心に据えた研究が目につく。これらのテーマからもわかるように、現在何が必要であり、子どもたちにどんな力をつけてやらねばならないかがうかがわれる。

また、そのようなテーマを設定した受講者から、次のような子どもたちの実態があげられた。

② 子どもたちの実態

- ・単語を並べるような話し方で、一つの文として話すことができにくい。
- ・友だちの話聞いて、それに続けて話すことができにくい。
- ・感じたことが文に表せず、すぐにあきらめてしまう。
- ・ひらがな表記の誤りや主述の一貫しない文など、書くことの基礎が身に付いていない。
- ・言語を正確に理解し表現する能力が養われていないため、簡単な会話しかできない。
- ・言葉をつかったコミュニケーションができにくい。
- ・話し方の基礎が身に付いていない。(最後まで話す、口を開ける、聞き手の方を見る等)

以上のような子どもの実態は、ある限った地域、大規模校・小規模校といった特定の学校ではなく、どの学校にでも当てはまるとされた。

(3) 研究の方向性

現行の学習指導要領「表現」の領域においては、話すことや書くことの活動を十分に行い、適切に表現する能力を育てることが指導目標として掲げられている。また、現実の子どもたちの実態から推測しても、新学習指導要領で掲げられている「伝え合う力を高める」こととして、自分の考えを自分の言葉で積極的に表現する能力や態度を重視して、「表現する能力」の育成が最初に位置づけられている。

そこで、日々の国語科の授業実践を振り返り、各受講者の研究を基に、「自ら学び、自ら考える国語科学習の在り方」を考察することにした。

2 実践例及び考察

国語科の学習では、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」という豊かで基本的な言語活動がなされてはじめて授業が成立すると考える。そこで、受講者からの研究のまとめを受けて、各研究テーマとの関係もあるが、新学習指導要領への橋渡しの意味も含めて、分析の視点を、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を特に意識的に捉え、実践の特徴を分析してみた。

(1) 「話すこと・聞くこと」からの実践例

① 「方言と共通語」実践より (教科書教材光村4年)

ア 研究テーマ設定について

研究テーマは、「言語生活を見なおす国語科授業の在り方」である。この研究は、授業者自身が、これま

での授業を振り返り、子どもたちの言葉に対する感覚を磨くような授業を行っていなかった。それは、教科書等の教材文に書いてあることを問うだけの発問、自分たちの暮らしにつながりを見出せない展開で、教科書は教科書で自分たちとは別の世界なんだという、現実と乖離した国語科の授業を行ってきたことである。また、実際の子どもたちは、正しい言葉を使おうという意識の弱さ、単語だけしか言わないことや、論理的な説明が苦手な子が多いなどの問題点がある。それらは、言葉に対する認識を十分に育てることができなかった私たち指導者にも責任の一端があったのではないかなどの反省からスタートした。

イ 年間計画

4年生では、身近なことを題材にした教材がいくつか設定されている。そこで、このような教材を通して言葉に対する意識付けを行うことが大切になってくる。単元名と言葉に対する観点は、以下の表のようになっている。

単元名	言葉に対する観点
正確に伝えられるかな 手と心で読む 方言と共通語 体を守る仕組み	話すこと、聞くこと 段落ごとのまとめ 言葉への関心 段落つながり

言葉への意識付けは、ここで掲げた単元だけで扱うものではないが、特に授業者がこのような言語事項の学習を取り扱うための年間計画を立て、実践することが大切である。

ウ 授業実践

- 1 単元名 方言と共通語
- 2 目標 方言と共通語の特徴と役割について理解し言語についての関心を高める。
- 3 指導計画 (全3時間、本時%)
方言についての説明を読み取る …… 1時間
方言の良いところを知る …… 1時間
方言の問題点と共通語の必要性を知る …… 1時間
- 4 本時の目標
普段自分たちが使っている言葉を振り返ることを通して、自分たちが使っている言葉の中に方言がたくさん含まれていることを知るとともに、方言の良さについても知る。
- 5 展開

学 習 活 動	教師の支援と指導上の留意点
1 方言についての確認。	その地方独特の表現であることを確認する。
2 普段話している言葉に方言が含まれているかを調べる。次の内容の話をし、書き出してみる。 ・昨日買い物に行った。 ・アンパンがすごく安かったので、たくさん買った。 ・でも、古いパンで食べられなかった。 ・とてもくやしかった。	いつもの話しあいの中に、方言が含まれていることに気付かせる。 例文に使われていない言い方を取り上げ、板書する。
3 板書した言葉が方言であることを確認する。	この地方独特の言葉であることを気付かせる。
4 例文の文と方言を使った言い方との感じの違いがあることを知る。	子どもたちの言葉に対する感覚を大切にす。
次時の予告	

6 授業記録の抜粋

- T 皆さんは、方言を使ってるのかな。
C 使っている。
C 使っていない。
T 分からないよね。そこで、これから確かめてみたいと思います。どうやって確かめるかというと、今から前に書く言葉を普段友達に話すようにしゃべってもらいます。
そのしゃべったものをノートに書いて確かめてみたいと思います。
C (友達との話し合い)
T それでは、どのような話をしたのか発表してもらいたいと思います。
C 昨日買い物に行っせん。
アンパンが安いからたくさん買ってん。
でも、古いパンで食べれへんかってん。
ごっついくやしかってなあ、となりのおばさんに……。
T まだ一人言ってもらっただけで、これだけ出てきました。まだまだあるんじゃないかと思いません。
継ぎ足して下さい。
C 昨日買い物に行って、アンパンがばろめっちゃ安かったから、いっぱい買って、でも、古かったのでめっちゃむかついて、食べれへんかって、とてもはがかった。
(以下同様に数名の児童が続く)
T じゃあ、この辺にしておきましょう。では、今皆さんが言ってくれた言葉と、最初に説明した言葉とでは、言った感じ、聞いた感じは同じだろうか。
C 全然違う。
C 最初の方だったら、ここの地域で聞いたことがない。
C 普段使っている言葉の方が、感じがいい。

② 実践からの考察

子どもたちは、言葉に対して無自覚の状態であることが多い。安易に聞いたり、話したりしている現状を捉え、授業者はこの授業で子どもたちに言葉の自覚を促すような授業をしたいとの意図を持っていた。

そこで授業をするにあたって、「休み時間の子どもたちの会話を録音したテープ」の利用を試みた。また、ノートを利用して、自分の話し言葉を文字化してみた。この結果、子どもたちは自分たちの言葉に注目し、

言語生活を見つめ直す機会になった。

簡単な会話しかできないというコミュニケーション能力の低下が問題視される中で、休み時間や授業中の子どもたちの言葉に注目し、話し言葉の文字化は言語生活を見つめるという点では有意義な実践である。そして、何よりも「話すこと・聞くこと」の力をつけるには、日常生活の中で意識して言葉を使うようにさせることが大切である。

また、この授業での特徴は、身近な話題と教科書教材との関係があげられる。子どもたちは、自分の生活とのつながりが見出せると生き生きと学習に取り組むことができる。自分が話すことしか考えなかったり、自分の言おうとすることが第一だった子どもたちが、人の話をじっと聞いていること、人が話しやすいように聞いたり、聞きなおしたり、というような習慣がこの授業で少しは身に付いた実践であった。

今後の発展として、この単元で学習したことを土台とし、インターネットを利用して、方言についてを全国から情報収集する活動や、地域に出かけての聞き取り、家庭で祖父母からの聞き取りを通しての情報収集などの学習が考えられる。

また、各地域の学校で、このような実践を取り入れることで、方言と共通語の特徴と役割について、一層の関心を持たせることも可能である。

(2) 「書くこと」からの実践例

① 「読書のまど」実践より(教科書教材東京書籍3年)

A 研究テーマ設定について

研究テーマは、「自分の思いをのびのびと表現できるように」である。この研究は、授業者自身が、4月に子どもたちと対面し、「表現」に関して子どもたちは、おしゃべりはするけれども、授業中に自分の考えをみんなの前に出すことをためらってしまう子や、感想や考えを文章で表しにくい子、また短文や通り一遍の文しか書き表さない子が多いことに気付き、何でも言える学級づくりとともに、自信を持って自分の思いを表現できる子を育てたいという願いから設定した。

そこで授業者は、一般に子どもたちは書くことを好まない、書くことをおっくうがるように思われていることに注目し、書くことを通して、子どもたちの表現力を伸ばそうと考えた。また、書くことについての個人差は、聞いたり話したり、さらに読んだりすることより大きい。そしてそれが非常に判然としているために、話し合いの授業になりやすいという反省もあり、

特に書くことに重点を当てた実践である。

イ 年間計画

1 学期	<ul style="list-style-type: none"> 学習態度を身に付ける。 話し方、聞き方の基礎を知る。 音読練習をする。(文章理解) 毎日、「ひとこと日記」を書く。(書く材料を見つける)
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> 話し方、聞き方の基礎を身に付ける。 たくさんの本に触れる。(学級文庫の充実、学校図書室の利用、読み聞かせ) いろいろな表現の機会を設ける。 「ひとこと日記」を続ける。(表現の仕方、内容の広がり)
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> たくさんの本に触れ、お互い感じたことを話し合う。 いろいろな表現の機会を設ける。 「ひとこと日記」を続ける。(内容の広がり、自分の考え)

授業者が、年間計画を作成する場合、教科書単元と照らし合わせた計画が主に用いられるが、ここでは、書くことについて日々の生活に根づかせようと考えた。

日記指導においても、ただ書かせるのではなく、年間計画の中で、上記のような設定が必要である。

ウ 授業実践

1 単元名	読書のまど「ぼうけんのゆめを育てる」																				
2 目標	「冒険の物語」に興味を持ち、楽しみながら読書をする。																				
3 指導計画(全16時間、本時4/16)	<p>「冒険の物語」に興味を持ち、読みたい本を選んで読む。…………… 2時間</p> <p>読んだ本を紹介し合い、さらに読もうとする意欲を高める。…………… 2時間</p> <p>自分が主人公になったつもりで冒険の話を書く。… 2時間</p> <p>お互いの創作した話を読み合い、劇化する。… 10時間</p>																				
4 本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> 読んだ本についてわかりやすく紹介する。 冒険の物語のおもしろさに気付き、自分で物語を創作しようとする意欲を持つ。 																				
5 展開	<table border="1"> <thead> <tr> <th>学習活動</th> <th>教師の支援と指導上の留意点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 班ごとに選んだ本の紹介をする。(物語の内容、おもしろかったところ)</td> <td>できるだけいろんな内容の本になるよう働きかけておく。</td> </tr> <tr> <td>・班の全員で発表する。</td> <td>どの班も発表できる状態であるか確認する。</td> </tr> <tr> <td>・聞き手は、創作のヒントになるような内容はないか、注意しながら聞く。</td> <td>班で協力し合い、全員が何らかの形で発表に関わるような配慮をするよう助言する。</td> </tr> <tr> <td>2 冒険の物語の特徴をつかむ。</td> <td>・「聞き手にはっきりと伝える」ための声の大きさや実物提示の重要性について意識させる。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>発表ごとに要点をまとめて板書する。</td> </tr> </tbody> </table> <p>ぼうけんのお話がいちばん好きなのはなぜだろう。</p> <table border="1"> <tr> <td>〈予想される児童の反応〉</td> <td>おもしろかったことに着目させる。</td> </tr> <tr> <td>・危険なところへ出かける。</td> <td>主人公がいろいろな形で困難に遭遇していることを押さえる。</td> </tr> <tr> <td>・こわいことや不思議なことが起こる。</td> <td>主人公が様々な困難に立ち向</td> </tr> <tr> <td>・未体験の出来事に出くわす。</td> <td></td> </tr> </table>	学習活動	教師の支援と指導上の留意点	1 班ごとに選んだ本の紹介をする。(物語の内容、おもしろかったところ)	できるだけいろんな内容の本になるよう働きかけておく。	・班の全員で発表する。	どの班も発表できる状態であるか確認する。	・聞き手は、創作のヒントになるような内容はないか、注意しながら聞く。	班で協力し合い、全員が何らかの形で発表に関わるような配慮をするよう助言する。	2 冒険の物語の特徴をつかむ。	・「聞き手にはっきりと伝える」ための声の大きさや実物提示の重要性について意識させる。		発表ごとに要点をまとめて板書する。	〈予想される児童の反応〉	おもしろかったことに着目させる。	・危険なところへ出かける。	主人公がいろいろな形で困難に遭遇していることを押さえる。	・こわいことや不思議なことが起こる。	主人公が様々な困難に立ち向	・未体験の出来事に出くわす。	
学習活動	教師の支援と指導上の留意点																				
1 班ごとに選んだ本の紹介をする。(物語の内容、おもしろかったところ)	できるだけいろんな内容の本になるよう働きかけておく。																				
・班の全員で発表する。	どの班も発表できる状態であるか確認する。																				
・聞き手は、創作のヒントになるような内容はないか、注意しながら聞く。	班で協力し合い、全員が何らかの形で発表に関わるような配慮をするよう助言する。																				
2 冒険の物語の特徴をつかむ。	・「聞き手にはっきりと伝える」ための声の大きさや実物提示の重要性について意識させる。																				
	発表ごとに要点をまとめて板書する。																				
〈予想される児童の反応〉	おもしろかったことに着目させる。																				
・危険なところへ出かける。	主人公がいろいろな形で困難に遭遇していることを押さえる。																				
・こわいことや不思議なことが起こる。	主人公が様々な困難に立ち向																				
・未体験の出来事に出くわす。																					

・悪者や敵が出てくる。	かっっていく姿を取り上げ、物語の主題に迫る。
・主人公はくじけそうになるけどがんばる。	記入する内容がわかりやすいように、本の紹介カードと同じ様式のものを書きメモにする。
3 自分を主人公にして、冒険物語の構想を練る。	書きあぐねている児童には、既読の本の内容に変化を持たせることから始めるよう助言する。
次時の予告	

6 授業記録の抜粋

- T みんなこれから冒険のお話を作るんですね。今日は、いろんなお話の紹介を聞いて、お話づくりのヒントを探しましょう。班ごとに選んだ本の紹介をしましょう。話す人は、はっきりと聞こえるように話しましょう。
- C (班ごとに前に出て、本の紹介をする。)
- 「〇班は、〇〇さんの読んだ〇〇〇という本を紹介します。この本は、(誰が)(どこへ)(なぜ)(どうなった)というお話です。おもしろかったところは、……です。
- 1班「たから島」2班「エルマーとりゅう」3班「きょうりゅうバブがとんできた」4班「空をとんだくじら」5班「かいぞくポケット人魚となぞの木」6班「オキクルミのぼうけん」
- T (班の発表が終わる度に、補足させたり、聞いている児童に確認する) どんなものを持っていったの?
- C てっぼうです。
- T 途中で何が出てきたの?
- C サボテンの悪魔。なぞなぞを出す怪人がいて、答えられないと食べられてしまう。
- T 「試練」ってどういうことか分かるかな。
- C たいへんなこと。しんどいこと。
- T このお話の中にはどんな「試練」があったの?
- C 火が燃えている熱い所を通して、次は裸で吹雪きの所を通っ……。 など

② 実践からの考察と児童作品抜粋

書くことを通して表現力をつけることは、日々子どもたちの日記内容も豊かにさせてきたとの報告があった。また、このように書くことを中心に据え、教師が年間計画の基で子どもたちに書く力をつけることは、今後も大切にしたい実践であり、言葉の意味を考えさせる展開も興味深いものがある。

今後の発展として、ここで培った力を土台とし、相手を意識したり、目的を意識した本の帯づくりの活動や絵本づくり、挿し絵づくりへも発展すると考える。また、言語に注目し、たくさんの本に触れ、自らの思いや考えを基に、お互い感じたことを話し合う活動は、今後の図書館教育へもつながる実践である。

以下にこの授業後の子どもたちの作品の一部を紹介する。

「たきのうらのどうくつ」
ある土曜日、だれとも遊ばず、プールも休みだったので、ぼくは大川のあたりをさんぽしていると、どこからか水と水がうち合うような音がする。音の方向へ行くと共に音も大きくなって、ついに音がさい大になると共に音の正体がわかった。「……」そこには大きな木があった。「……」ぼくは、物も言えず、ただぼうぜんと立ちすくむだけだった。

ぼくは、こういう物には、決まってひみつがあるなと思った。なぜなら、ぼくは今まで本の中で、ぼうけんの話にしぼるとぜったいこんな事が起きて、何か起こらないはずがないのだから。

ぼくは、たきを調べてみようと思った。ふしぎでたまらまかったからだ。……

(3) 「読むこと」からの実践例

① 「一つの花」実践より（教科書教材光村図書4年）

ア 研究テーマ設定について

研究テーマは、「人物の気持ちを深く読み取り、コミュニケーション能力に生かせる授業の創造」である。この研究は、国語の物語文の授業を通して、子どもたちに人とのコミュニケーション能力を育むための授業はどうあるべきかを考えた研究である。

イ 研究実践の特徴

この研究実践の特徴は、作品中の言葉や漢字から物語の内容を自分の力で読み深めるという点である。そのための手だてとしての研究されたプリントを紹介する。

物語文や説明文を取り扱う場合、よく行われている取組として、新出漢字や難語句調べや、通読を一通り行った後、各場面の読解指導に入るのが通常である。

そこで、実験的に、新出漢字や難語句調べの学習が終わった後に、読むことを意識したプリントを作成した。そのプリントとは、(ア)教材文をそっくりそのままを写し取った読み仮名を書き入れるためのプリント、(イ)教材文を全てひらがなで書き写し、漢字を書き入れるためのプリント、(ウ)教材文から文末だけを取り除き文末を意識させるためのプリント3種類である。

「一つの花」（4年教材）を一例を以下に示す。

（「一つの花」(ウ)のプリント例）

（注 文字フォントは教科書体が望ましい）

<p>「一つの花」 「物語」 「一つの花」 「ただけちょうだい。」 これがゆみ子のはっきり覚えた最初の言葉でした。 また戦争のはげしかったころのことです。 そのころは、おまんじゅうだの、キエラメルだの、チョコレートだの、そんな物はどこへ行ってもありませんでした。おやつどころではありませんでした。食べる物といえば、お米の代わりに配給される、おみや豆やかぼち</p>	<p>さい。 線のところ に読み仮名を書きな さい。 四年（ ） 組名前 今西祐行</p>
--	---

(ウ)のプリントは、漢字に読みを入れ、文字を正確に読むことを通して、内容まで読み深めるために作成したものである。このプリントは、子どもたちにとっては、ゲーム感覚で取り組むことができ、どの子も意欲的に取り組むことができた。しかし、次に(イ)として作成し

たプリントでは、既習の漢字を全て漢字に直さなくてはならないため、やや時間を要したり、国語の教科書を必要とする子どもも存在した。

② 実践からの考察

このようなプリント学習は、「教材の新鮮度を失う」という考え方も一部にはある。しかし、言語事項の学習を基にして、読み取ることが目的でもあるこの学習プリントは、現実の子どもたちが読むことへの興味・関心を高めたことになった。

子どもたちが、プリント学習を重ねる中で、知らず知らずのうちに言葉について一語一語意識して読むことを身に付けた実践である。また、その証として、次の教材においても子どもたちから、プリントの要求があった。このことは、子どもたち自身が教材文をしっかりと読むことに興味を示し、読むことが好きになった成果である。

書きながら読むということは、授業の中でも取り入れられている。しかし、このようなプリント学習は、教材文を子どもたちがしっかりと正確に読む手助けともなる実践である。

また、授業者がこのようなプリント作成を通して、授業者自身が作品をしっかりと読み取る手だてともなる。その際には、挿入・削除などの作業がいと簡単に行えるコンピュータの利用が有効である。

以下に授業者自身の研究後の言葉を一部紹介する。

（研究を通して子どもたちの反応）

不思議なことに、国語科で物語を学習している期間は、子どもたちの生活はいつもより落ち着いている。言い争いごとも少なく、どの子どもも穏やかな顔をしている。4月からこれまでを見ていて気付いたことである。特に普段は乱暴な言葉を発していた子どももこの教材「一つの花」を学習してからは、仲間への思いがけない優しい言葉かけをするようになった。人物の気持ちを想像すること。そのために深く読み取る手だてとして用いたプリントが、子どもたち一人一人の読みを確かにさせた結果である。そして、物語教材がこんなにも生活全体に影響を与えることだったと改めて感じた。人に対してどれだけ優しくなれるか、どれだけ謙虚になれるか、人をどれだけ理解しようとするかなど、そこまで考えられる人間を育てるのに欠かせないのが国語なのだと感じた。

国語を、そして「言葉」を簡単に扱いきりすぎたのは、子どもたちだけではない。実は教師である私もそうだったんだと、この研究を通して気付くことができた。

(4) 「総合的な学習の時間」への基礎づくりとしての国語科教育のあり方

国語の能力や国語に対する関心・態度は、国語科だけでなく、「総合的な学習の時間」などの学習でも養

われると考える。

「総合的な学習の時間」のねらいは、自らの力で学び、自らの力で考えることが特に重要視されている。

子どもの求めや願いから出発し、子どもはそれらを実現しようとする。その過程で必然的な成り行きとして様々な問題や課題に対して全力を尽くして取り組むことが、自らの力で学び、自らの力で考えることにつながり、生きる力が育まれるとされている。

それらの問題解決や課題解決に向けて子どもたちの基礎となる力は、教科の学習で培われなければならないと考える。

例えば調べ学習が重んじられる時間と設定された場合、どんな力が必要になってくるのであろうか。以下に「昔話の発表会」(教科書教材東京書籍3年)を基に合科学習での実践例から考察する。

本単元の目標は、ふるさとの民話に興味を持たせることである。そこで、「ふるさとの昔話のテレビ番組を作ってみなさんに紹介する」とテーマを設定し、国語科で培った力を基礎として、地域に語られる昔話をVTRにまとめ校内テレビ放送するまでを実践した。

これは、地域の特性を生かし学校の創意工夫を生かした取組であり、現在では国語科を中核として、関連教科の時間を用いて発表会をする実践である。

またこの実践は、子どもたちにとってテレビ番組作りを通して、みなさんに紹介するという目的意識、相手意識を持つ中で、声に出す楽しさや表現する喜び、そして友だちと協力して作ることが意図されている。

平成14年度から、「総合的な学習の時間」の設置により、こうした実践が今後の参考になる。このような実践から、国語科を中核に据え、「総合的な学習の時間」へと結びつけてみることも興味深い。

その証として、書物から調べる、あらゆる情報機器を用いて調べる、地域の方々からの聞き取りによって調べる、そんな行為は、すべて国語科でなされる話すこと、聞くこと、書くこと、読むことが基礎的な力として必要になってくる。また、特に自らが調べたことをまとめることにおいては、書くという力が今後一層求められる。こうした一連の行為は、国語科教育で培われる力と関係が深いと考える。

3 研究のまとめ

研究成果のまとめから、自ら学び、自ら考える力を培うためには、話すこと・聞くこと、書くこと、読む

ことを重視し、国語の能力の根幹となる表現力、理解力を育成すること、確かな言語能力を育成することが大切であることがわかった。そのためは、授業で創意工夫が大切であり、日常生活に必要な「話す・聞く、書く、読む」などの基礎的な内容を繰り返し学習させることが必要である。以下に、今後工夫すべき項目をまとめた。

- ・自分の思いを言葉で話すこと
- ・順序を考えながら話すこと
- ・一度で話を聞き取ること
- ・聞き取ったことを友だちに言葉で伝えること
- ・聞き取ったことを要約してまとめること
- ・子どもたち自身が、自分の言葉づかいに気付くこと
- ・自分の思いや考えを文章で書くこと
- ・相手意識、目的意識を持って書くこと
- ・教材文を正確に読み取ること

これらの項目は、指導者たちが共通意識の中で系統的に授業を通して身に付けさせなければならない。また子どもたち自身が、これらの項目の必要性を感じられるような工夫が大切である。そのために、指導者は、個に応じた指導と、子どもたちの実態把握が不可欠である。

おわりに

今年度は、一年間の研究講座を通して学校現場での日々の授業をどう改善工夫するかをサブテーマとして講座受講者と共に研究を進めてきた。参加した先生方の熱心な取組に敬意を表したい。また、実践を通しての課題も再発見することができ、有意義な講座であった。言語の学習としての国語科教育のめざすものを今後も見つめていきたい。

〈参考文献〉

- 1) 大村はま『大村はまの国語教室』小学館(1982)
- 2) 青木幹勇『書きながら読む』明治図書(1984)
- 3) 文部省「小学校学習指導書」大蔵省印刷局(1988)
- 4) 文部省「小学校指導書国語編」ぎょうせい(1988)
- 5) 真野宮雄『21世紀に求められる教科教育の在り方』東洋館出版(1995)
- 6) 児島邦宏『小学校「総合的な学習の時間」研究の手引き』明治図書(1998)
- 7) 文部省「初等教育資料」1月臨時増刊 東洋館出版(1999)
- 8) 「学校経営」1月号 第一法規(1999)